KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

雜海記 十

713
3141
10

特
へ 13
3141
10

建武三百八十八年

大仏九郎光基

金磯榮

地上に落。銀河の星の山くずれつる明松旗棒物夜風に
陣鉦大鼓鯢波亀毛川の漲音ふるぎき合て。いとゝさまくを聞へく
閑作ハ刀を引向ふと屹と見て渡して。シャめくき金鼓のひぐき我と打合
鎌倉勢遠巻をしてあがえてう。さくひ万騎の敵ようしとおでう支乃ある
べきや。わが小黠ヤと冷笑油断と見て修行者ゞ又斬つくる刀を
ろ一も打落し。手ぞや〳〵側ふ引つけて。勝の下ふ敷さる折一も雑兵
許多いけ来る鎗とゆ稼ぐてつゆ寄ようう。閑作ハ修行者と飄退庭ふ
とり立身ぐ〳〵して。突来る鎗と左右ふ振ぐ一つのぢるゞ二人一度よ
るぐう。倒ヤ上と飛越て。又突くる鎗の血留と捽て。跳やれた鎗乃
手と放ち四五間飛て大勢の群中ふ倒れさう。うわ〳〵ろぐるふ隙間を
ゆ。鎗ヤとつて突鎗ハ篠とつゆる急雨の如くひらく光ハ電光乃

山の端めぐる如くなれど。是と物の数ともせず。飛龍のたくみにめぐり。
猛虎の如き勢ひして。前後に當り左右を支へ。陸離々々と斬払へば。
雜兵等は敵しかね。しどろになりて引退く。修行者は隙間なくして背後
抱にむずと組を。腰とひねりて振れしが。襟首掴てうごかさず。仁王立に
立する処に。弦音高く鳴りて。白羽の箭飛来り。閑作が胸板をはつしと射るが。
うけとめず矢幹をはづけて飛散ぬ。閑作は呵々と打笑形も見せず。遠矢を射る
卑怯者我身は鉄石なれば弱矢の立べきやうなし。嘲。彼方に声高く

　ますらをと頼の雁の別路は待間ひさしき名残なりけり

とよみしもおぼえず一首の歌を吟ずるにぞ。さしもの閑作おどろきつゝ又いはく。大佛
九郎さのとなさうぞ七月影ケ谷判官の家臣嚮に勘当の武部兵衛なり
よぶ声して。遥向の木陰より。あらはれ出て歩来る其扮装いかにとなれば。緑なる

額髪を玉ねぢに額に繋と振かけ。双蝶の金物打たる鱗巻を結なれ。小櫻
威の腹巻に。丹地の錦の陳羽織を著下て。秋野の摺箔しける白精好
の大口なんだ。黄金作の太刀を鴎尻にさげ佩て。蛸藤の弓を小脇にかい
こみ。物具の金物を月影に耀し。光滾て歩来る其形勢希しき氣象威風
凛々たる若武者なり。閑作は肩をゆすりてわつて笑ひ。しどけに名乗し故
いかなる荒武者か出来るかと退つて手にも足ざる小冠者原。討手の大将なんど
よばゝりいふのにて。あらのこゝろにたれ。我こそ大仏九郎と呼退は何の狂言貞直
殿は知具麻川に入水ありける状ありぎるぞ。備殺は安からねども。童を相手にかゝらば
退し。汝が命を汝に与へて富退ぞ。とく叡れと高笑ひなぎ死にやぐ不敵の詞
助は少も臆せるなしきらで莞尔と笑。入水と予が則偽人を欺死間の計なり。今
ゆるされてもちいらん。先此鎌倉極楽寺の切通に於て。我養父瞥を

遠矢ゐけ。日月の護を奪取しへ汝ぞ疑ふ。其證拠い是なり。
腹巻の引合より。矢の根といふて目前ゐ[illegible]。此矢の根ゐおびえわ[illegible]。
養父と射る此矢の根ハ。他國ゐまれる鏃石。我是を證拠ゐ仇を
ぞ絲蛭牙山の麓ゐ宿る木柿の森の邪神入身淫供をする[illegible]
射る矢ゐ[illegible]ふと見れど。今我射る白羽の矢ゐ。これも[illegible]石鏃
[illegible]れば。これぞ仇の手ゐ[illegible]人身淫供の棺ゐ入かの社ゐ到て試るよ。
果て真の変化ゐ[illegible]。いよ〳〵怪[illegible]の山深く登て見るゐ化石谷ゐ鏃石多
ゐ。又石の刀を用ると鉄刀ゐ異なり。察る所柿覗とありて月影ケ谷
の地ゐ館ゐ入竜[illegible]も彼奇石ゐ洞ゐ住老女[illegible]。曾十洲記ゐ[illegible]
西海の流州ゐ昆吾石ゐ。剣ゐ作ゐ水精のごとく玉と割ゐ沈と[illegible]
[illegible]。又玉水素問を注して云肅愼國の人柱木と以て矢[illegible]。青石と

鏃と毒を施し。人ゐ中ゐ即死[illegible]れを石砮と号く。又藤州ゐ青石を以て
刀剣とすること鋼鉄のごとしと云。汝これ等ゐ[illegible]化石谷の鏃石ゐ毒
を施し。波右衛門を射る[illegible]ゐ疑ふ[illegible]。故假名寺を陳所[illegible]。
兵具をとりの〻向ふ。養父の敵と[illegible]私知具麻川ゐ入水といふ
活残て。足利殿を亡し北朝をとりゐ[illegible]と味方を集る謀叛の張本大仏
丸郎貞直と。とりく本名名告べし。君命ゐ[illegible]打手の大将動之助氏邦
汝ゐ首を打取て。初陣の高名ゐ[illegible]。
烈しく閑作も肝を突る如くゐて。眼血ぐり面色麦頭の汗烟の如ゐ
立のぼり。芦花の如くなる長髪髭をそりくゐ[illegible]。牙を噛拳を握鼻と
ふきハりし。堅庭を踏[illegible]て。我自意と蟠龍ゐ比して沉中ゐ蟄し奥
鱗と伍とゐのぐりして。升天の時至る[illegible]待つゐ。汝等ごと小冠者ごとゐ

見あらんとすれるうちそーきよ。さるほてもいぶーしく。我苦形の戰場ふて。生子ふそそる香色の裏ふ書るをー一首の歌を。汝今吟せーいるもあるぞ。それ聞んといひそれど。動之助唯々其不審理す。委語て聞にてらんて腹巻の引合より位牌を出ー。我先刻南餘兵衛ーとふ者を忘太賣の商人ふ身を扮させ。奪さ色此位牌ふ大仏九郎貞直霊とるせーふ是則養父の仇の形代す。かの豫讓が衣とさーる例ふるーひ今父の仇を報す。おりひまれやとよぐーす。太刀をとーると抜放ーて。位牌と切割いたぐまく物具を脱捨て雪の如くす層を推層脱太刀とさーるふ取直て。腸腹ふ突立す。大仏九郎ふ益いぶう。汝何ゆえ自殺をるぞーと問けるぞ。重之助若き息をつきて云君恩おりた嚴命すしば黙止ぐーく失謀叛の張本を打手の大将ニッふふ産の恩とりすふ深き養父の為の復讐公私

とゆる忠孝ニッ見のぐと貞のわるざれた。死ーて親子の名告をせんと。其故ふ此自殺ぐいふ拙者ふ苦形の戰場ふて出生るるふ身の實の子るぞや。其證拠見ゑーと。陳羽織をさーぐ是と着ーて打手ふ来ーふまて自殺の覚悟ぞといひそれど。さーのの貞直肝つぶれてぐうーとなーー。陳羽織とーり上て好々見ふ。まぐふ方うた雲鶴の錦すれた。そそ我子そのりーと。猛心もよりつ。唯惘然さるぐりす。良ありて修行者ふ打向ひ。先刻汝香色と證拠ふーー我子すーと名告ーー。苦形の落城と指折てぐーれば今年で丁ど十八年。汝が年のころわひ。二十と過ーーとるゆる。偽者と推量ー。我又汝とりて郎等剣太と名告ー。汝とわぎむき人質ふ取もん計ぐる。そそ汝ふ何者ぞと問れた。修行者云。汝自我名と位牌ふるーて奈死間の奇略と察せーゆる。動之助が呼持する香色ぞ。假名寺の陳所

ふて受取かの香を焼て汝が忠心を試さう。我實は山咲庄司が一子山咲餘吾郎雪村といふ者なり。先頃兄山咲窓閑が隠宅ゟ紫の袱袋束ねたる朱塗の箱を奪ひ出る曲者と。窓閑ゟ問ひ責問つるゟ。大佛九郎貞直が郎等奥洲剣太といふ者なるが。南朝の帝。古今傳授の秘書を盗めるゟ。其秘書のあるある。此箱を奪出し〻白状し。其時彼が物語ふて。動ゝ助ゝ素姓をとらく知つるゟ。大仏九郎が存亡いかゞと。京責問ゝ。入水ゟ疑うとゝのそ白状せずと。火水を以て責るれども白状せず。自舌を喰切て死しるゟ。先刻汝が奥洲剣太と名告しと実しゝ奥洲剣太其ゟ。其ゟ。假名寺ゟて立ち合せ。此家ゟ立ち高燈籠を切落を相図と さるあさてそのゝとゝらふりこゝゝ貞直いく。もらべつゝ。我子ゝ 嵩元渋右衛門ゟ育られしゟ。あやまちなく。渋右衛門ゟ元来主君相模太郎ゟ

殿と敵の手ゟ流て打しゟる不忠至極の五大院左衛門が子なるゟ。一つゟ日月の旗を奪ん為二つゟ其子を打て相模太郎殿の讐を報ん為そ〻しゟる。今ゟ〻恩を讐ゟて復〻ゟ〻ゟ〻ゟ〻と歎息して〻〻〻動之助ゟ苦げゟ息をつき。されば生子のゝ育られ大恩ゟ養父の仇をもくんとすれば。実父のゟんを打捨べゟ。それゟ養父の仇を射ん心で。先刻射かけし白羽の矢ゟ。鏃をとゞまて射けし養父の為ゟ弓を引。産の親ゟ對して引ぬと〻ゟ心そ。是父子の義を二つゟ分ていづれを重ん所ゟ。養父の敵が実父ゟてゟんとゝ露ゟ。世界のうちの悪因果と。此身一つゟ引受て。ゟるれ者ゟ我身ゟ。推量てよ父ゝと。いひてたゞ這寄て。おしゝと涙ゟ血ロの。鮮血と共ゟ。ゟ〻ゟ〻ゟ〻。烈火の如き貞直が打もられ又陳利織と

取上て。序手ゆ介抱しつゝ。苦形の戦場ゆて。汝が出生せしこと。此雲鶴の地殺と幸ひ。此子の齢千歳の鶴ゆあやうれと。心ゆ祝せ。ひ。ひ。ひ。霜と悲む夜の霜子とおりゆて泣為の。証ゆ[illegible]因果さよ。生まる時襁褓ゆしる世羽織が。今死ぬ時の経帷子ゆ[illegible]。いとおりひ。ひ。ひ。此錦いうる者が織うて。ひれ因果と見なるぞやしらひて羽織。ひしと抱きあ。尚夫不當の勇将も恩愛ゆ大敵ゆ。背後をみなく泣居う。時ゆ不思議や荒鶴。箭とくるして軒着し。嘴を鳴しく動之助ゆ恋つきくるむ。動之助ゆ[illegible]て。此世のうちの板目鳥地獄の呵責眼前。无慙ゆうるあり。此時月ハ[illegible]又雲ゆかくれて暗りしが岸ゆ繋し。苦船しる。山咲庄司雪森鉄巾野袴陳羽織。箭手勝揖ゆ月とくるゆ。苦うゆ[illegible]

提灯振奨して門口ゆ歩を寄。裏の板子とうゆびね。負直ハ聖霊を送る火の芯新ゆと用意し。麻幹とつゝて火を燃し。明松ゆして[illegible]り奨し。動之助が荒鶴しゆ責らる苦痛の体と此しんて。旦怪旦悲を涙瀧然腰蓑ゆ散ゆ。波の滴ゆ異ゆし。蛭牙山の雲根の花女いつのゆゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ居る。此折二階の障子とひきて[illegible]る姿白髪の頭ゆ髪紐錦の袿緋袴笛とくくて吹ゆし。其音凄風楚雨の如。いしく衰とそゝゆる。負直涙と押のゆび。あかゆるゆしや身の罪業を今ぞ知る懺悔ゆ罪と滅とと聞ゆ我憂業のゆしゆ語るべし。

実や世は中とゝしとゝろゞ捨べきゆ其心更ゆ夏川ゆ。鶴つゆしゆ[illegible]ゆ明松振立て。藤の衣の玉。箭とひきて取出と。志萬豆巣ゆ巳ゆ鶴しゆ。此川波ゆゝろと放せゞ。面白のゆりさまや。底ゆも

足ゆ。葬火ふれどもく奥と追まんし。かづーまあげ。とくひあげ。ゆゆ色と
くくとくくの罪も報も後の世も。ワもくくておりーうや
其殺生の罪、おりの。親の因果が子ゆ報荒鶏の責の不便さとて。明松と
投つれだ。鶏の鳥どもいたつと退。動之助いつく息。絶々ゆぞうりゆくる。
雲根の老女も笛とゆうて。いそどくく二階とゆう。動之助とくの抱き。苫形乃
戦場ゆて。そうくゆ産する實の母。更級とくの我身ゆう。産と其侭活別と。
いづくゆ居やとおりのーゆ。逢ゆ忽死別の歎さ。うくく薄き親子の縁いう
者が親とゆう。子と生てい来つるぞや。娘葬火が行方おれざるゆゆ。
爰へ来へせぬく。先刻爰へ尋ゆ来て。門ゆ彷徨しが。修行者の焼されし
香のいぶーゆ。裏口より立入て。拍子へ残ど聞とうぬ。我子とゆ露ちくば。
足利方のまハー者と察せーゆゆ。殺ゆ親まんとそゆ。我悪業の報なり。

不便の者の最期やと。声ありつくゆれだ。手賀へやうく起上ゆさそへ夫の母人が。
親子へ一世と聞ゆしだよく顔見せてさそて。母の手を握てゆ見あくる顔
見おろと顔大膽強氣の老女ゆれど目とゆう涙鬼薊ゆ露ゆのまぐどく
ゆう。先刻より門首ゆ拍子と窺山咲庄司此時裏ゆ走ゆ入いくゆ大佛
九郎殿戦場ゆていゆ互ゆ面と見おくゆ名へうゆて聞ゆん月影不谷判官乃
家臣山咲庄司雪森とゆ我夏ゆう。陪臣ゆどくゆ主人の名代ゆうゆ。
我苫形と飯陳の折ゆ山風ゆ吹落して。我手ゆ入ー密書の一通隠語と
以て記ゼー故事分明ゆどくゆ。當名へ大仏九郎とゆれと入水せーゆ
傳ゆうんと。我推量ゆ景てゆだ。死間の奇略今ゆうくどくとく
ゆびさんと礼儀正ーくゆたし。真直ゆ威儀とくくゆさんゆ騎五騎
とりて攻くゆ物の数とゆうゆ大敵ゆ。敗軍ーゆ我ゆ。

今はつまびらかならん我苦形の一戦にまぎれて打死と心ざす所。其折からしきりに飛来る箭文の一通ひらき見れば主君相摸次郎時行殿隠語を以て御筆にかき玉ふ奇密の文。我虚腹を切て暗に城を落る故。汝も打死する事なかれと記されしゆゑ。ふかく思ふ所ありて。和具麻川に入水と見せて敵を欺きつ。我て水練に達せしゆゑ水底をくぐりてやすく逃去ぬと物語まで。庄司いはく。我もとよりさもあらんと察せしなり。主君判官梓弼が詞を信じ。相摸次郎殿苦形にて実に死亡ありしと思はれん謬り。時行殿の行方はいかにと問ふに貞直は口ごもりていらへざりけり。時に又陣鉦大鼓を打鳴し。彼方の岩蔭より二ツ引両の旗をさしかざして月影谷玉兎之助身上をまもりつつ露助夢平等両人に案内させて岩上よ出来て声をかけていはく九郎貞直よく聞べし。我父判官照影世を

足利殿にきこえて北朝の帝に奏し奉る。南北両朝御和睦あるべきよしに定まり。足利殿より吉野の皇居に進奏まる。御和睦の盟書をまゐらせ受てそれにあり。それにつき勅して時行も助命しゆるされなばでまで行方をまづしべしとのたまはれど。庄司も其詞の尾について。さのみながらで聞んとぞ責よるなる。時に老女すすみ出其儀は妾が物語ゆかん。そもそも相摸次郎殿は箱根水飲峠の合戦の後は深山幽谷の裏に蟄しおはして鎌倉には面を見知者なしと幸ひ宮奴に身を扮し幣又と名のらせ。まさしく妾が従者の様にもてなして世をしのばせまゐらせしなり。又妾味方を集ん為鎌倉を徘徊しける時奇石の洞にある蛇石と大指になぞらへ諸人を欺き。蛇が谷の因果婆々と呼れし妾なり。其刻箕原蟻右衛門。袴田緋九郎等を味方につけしが彼等がゆるかにも浅きゆゑ。密事もれ出走して。其後戮せられたり。鎌倉の

風聞ふれと聞ぬ。又都ふあり時。五条坂の阿曽比。吾妻が所持する
濡髪の名笛と奪しのれい。原亡君相模入道殿の秘蔵の笛なる故ふ。
其人形身とも見たやとおりひて奪しなり。則今吹くるい其節なりしとも
ふぞ。餘吾郎いれと聞老女とくくふ見知わしだ。さてい其時我よ
やくれる老女い其人身ふてありしとも。老女い打うむづきつ。又そく
げふめづしき對面あり。其後妾太麻の覩女と名告て。ふくび鎌倉ふ
あり。月影个谷判官の息女。病ふあむと聞。幸ひ時行殿宮奴よ
扮して鶴个岡ふあんせーゆ。覩女の嘆と。月影个谷の館ふ入竜梓の
弓と載る器の裏ふ火氣と仕竜。化石谷ふ生ずる蛭石とふい奇石と
暗ふ洗米ふ交て蒔散し。火氣ふちくび蛭の蠢やくふ見ゆ。と
洗米真ふ蛭ふ化しくりて。日月の旗と鶴个岡の神座

くり蛭さーむへき計略なり。又我くく夫婦一つ処ふ住ざるい人の疑といとふ
ゆえなり。妾い蛭牙山ふ別居し。味方の者と撩者ふして山中ふとくくと
彼ふるふいひふくせて。木枯の森の邪神とふくり。白羽の矢とるーふ
ふて人身御供と取しふ。其子と遠國ふ賣渡して。軍用金と貯ぬ獣の
皮ふ化石谷の天狗の瓜石とふりの瓜植て。てれと妾ふ手ふわひ真乃
変化とふりせり。或い奇石洞化石谷の王石藥石と取出して黄金と
替ぬ又碪ふ用ひる石の脆百い原化石谷ふ華る。五大院左衛門ふ死
骸の石ふ化しくるり。彼ふ遺骨とふくーも。相模太郎殿の恨とふえ
為ふ碪ふして常ふ打ぬ。今ゆえで人身御供しくりて。人の子と奪ふ
我悪報忽我子の身ふ報りる憂目の罪科と。滅せんとめの懺悔ふあり
此家の下人崩築の呉呂藏とふい則宮奴の幣又ふて実い相模次郎時行殿と

はゝ助命ありたく。妻は過つる元弘三年鎌倉にて打死したる長崎勘解由左衛門為基が妹なり。素姓を語るとなりやとの仰庄司いとく
されどこそ女ふまれなる膽氣の烈しき。扨身なる夫婦はいとゝ人なるよ
忠義を似されども善とりつて行とぜぶる支惜むべし残念さよ。崩壊の呉呂
藏とつゝは時行殿ふ疑ふしと。我推量ふ露とゝど。助命の儀は氣づゝ
あるかとのべられた。老女いろく。それ聞べりや此世ふ望ふし。我子と共ふ死出三途
の旅立せん。去かゝ娘ぶ至火ふあらで死るが残念なり。南無あるべ仏し唱
つ。懐剣吭ふ突立ち貞直て。今妻の語しこゝく。夫婦こゝろと
尽しさゝくの罪とたゝりて貯へる軍用金。まさりの時の鎧腹巻こゝし
ゝれよと諸層脱ぎ肌着ふひしと許多の黄金と縫つけて。鵠の
羽とりとゝ祝しこゝくあり。動之助ゝ射る箭幹のゝぐけ散しとゝ

貞直又ゝ人ゝ両朝の主和睦さるゝ人ふ。時行殿の助命あれゝ我望外ふ
ふし。唯一目あひたゝ娘ぶ至火行方ゝれぬ不思議なり。親の死目ふあふ
ざるは。宿世なりと落涙しきべし歎ふ沈しぶ。此と心とゝり大音あげて
名乗名は桓武天皇第五の皇子。葛原親王ふ三代の孫平将軍貞盛
より十三代相模入道高時の内ふ鬼神とゝれる。大仏九郎貞直と賞元
動之助氏邦。初陣ふ打しゝ。手柄とゝや讃とやと白しぶ。肌と
ゝつぶけ刀と腹ふ突立ぶ。山咲庄司立寄て。天晴由々敷打死とやと賞養
云て。餘吾郎ふ打向ひ。汝が奪しし人質はゝ用ふし。父母の死目ふ
せぶてあはしふとゝ以て餘吾郎心得て。笈の扉とひらくとおそと共裏ゝ
まろび出しは則是ぶ至火ゝ。父ふ取つき母ふ取つき。動之助ふ取つて
ゝとゝとゝと迷ひて。声ゝ泣さけびがべと伏て身をもだえ。現心も

かるに。良ありて起上り。動之助うしろへ来る石の矢の根と取手もんどり。
吠よ実立人とちるを。老女更級いそがしくもしぶ。こや娘せりて汝を
生殘り我くが亡後の。追善供養香花を手向て給よと云を娘ハ声
ふりに。今笈の裏ゆて給へ支とうけ。動之助殿へ妻の兄を
おいたり。それ〳〵ちかに。意の重荷と身ゆ負て。石の枕ゆ假寝せ。此世
うゝの畜生道かどてかゝ人居らべきと。いひて又打伏て泣沈ム。貞直いと
其儀ゆゝ。汝ハ原我実子ゆわゝ。十四年前我鎌倉とゝ人さゝ
去のびて立越う道武藏の篭手差原ゆて。大鷲四歳を吹の児と喰介て
ちる紙見つけて鷲と殺し。其児と手ゆけ取て立帰り。育上ハ則汝なり。
さる由ゆ動之助ハ兄弟ゆ〳〵物ゆる。庄司ハ〳〵と聞〳〵。其児の
高頬ゆ黒痣ゆかるに〳〵いそ〳〵く問給へ。貞直ハ〳〵主ハ〳〵ゆ

去て居りるぞ。いふも高頬ゆ黒痣今ゆ有りゆ。それ〳〵と突ゆ庄司ハ
つゝぐ打まりゆ。さて〳〵我子の小雪ゆ〳〵ひて。甘縄の神支の〳〵
鷲ゆさ〳〵ゆ居る餘吾郎〳〵ハ汝ら兄〳〵。物語をれゆ居る。
〳〵ゆ火ハさて〳〵妻ゆ實の父實の兄ゆて〳〵て。庄司餘吾郎ゆ打向ひ。
ゆ又涙ゆ。貞直夫婦ハ痛手ゆ屠ゆ我〳〵夫婦死〳〵るゆ〳〵。
謀叛人の娘と人ゆ指さゝ。路頭ゆ袖とひろげても。情と〳〵る人も〳〵。憂目
と見〳〵とゆげ〳〵〳〵ゆ。〳〵ゆ實父ゆ〳〵ゆ會手後ゆ我〳〵ゆ冥途
までの忘念ゆ。〳〵〳〵やと夫婦の者〳〵ゆ〳〵ゆ庄司ハ刀と
ゆ〳〵て抜。〳〵火ゆ緑の髪と切取て。今〳〵ゆ汝尼〳〵ゆ。貞直夫婦の
菩提とゝ。養育の大恩ゆ報せよ。やよ動之助夫婦ハ二世〳〵ゆ
後の世ハ此娘と。汝ゆ妻ゆ〳〵ゆよ。此切髪ハ聟引出冥途の土産よ

持去と落涙して手を涙せど。動之助はおー戴唯掌と合だうう。
負直は莞爾と笑ひ。あかうまーやーやるぞーや。我も又紙糸のぎー
ふて。狼ふあてる物ありて。左の小脇ふ突立る刀ふ手とり。右の
傍腹まで切目長く掻破て。中る腸と手繰出ー。傍辺の松の空ま
投入ぐるふ。忽枝葉動揺ー。血しおの纖と忌るふや。空の中ーり風を
生ー白木の箱と吹上ぐる。餘吾郎手ぐやくこれとりてひらくさ見るま
是則日月の文旗ぞ。其ま玉兎之助ふなる。玉兎之助ふこれと取て
うやうしく押戴両朝の御ん和睦をむまで。此も旗ハおのれまぐーく
あつかうべーーそ取ぐるぐ。再又陣鉦大鼓と乱調ふ打ぐ。揺
烈ぎ川風ふ一間の障子と吹倒ぜば。迫ふ見波を亀毛川。四方の
旗捺物陸ふ明松川ふハ篝火天と焦ぐくまで。水ふも暗くぐ光

南餘無衛が下和ふぐ。鵜養ぐま数多の船と漕出して。
呉呂藏が乗る船と取ぐ。呉呂藏ハ相模次郎時行と名と
名告て。阿修羅王のあれぐーん。ぐくやーぐりふ勢ふて。寄来る鵜養と
手玉ふぐ。投こむ水音水煙おめ光さけびぞ戰声。川波の涙音ふひぐき
合て。をきまーぐりる光景ぞ。負直夫婦ハぐんと見て。助命とぐいつる
おやと詞ハ玉兎之助いひぐ。疑ぐ諸軍とぐちぐど鵜養ぐまと
戰ぐん。足利殿ハのぐぐ。助命ハぐーもいつるぐーいで我自立越て時行
殿ふ對面ー。和睦助命の盟書と渡ーて戰とやぐぐーぐど側ふつま
ぐふ露助夢平心得て馬引寄まハ玉兎之助ぐーーと言。一鞭あぐん
ぐーぐぐが。動之助が死別とぐふ。ぐーたるぐ唐綾の鎧の袖と
おちぐる涙とぐぐん。露助夢平いづんく續と下知ぐ。山と巡て走去ぬ。

程なく彼方ふ揚貝と吹立るもしるしく。陸の明松船の篝火一度ふ消て忽暗夜の如くふ成。戰声も已ふ止て。唯松風と川波の漲る音のみ殘り。貞直夫婦い安堵の体。庄司い夫婦ふもちむひ抑又等の集金い鎌倉葛西谷の東勝寺ふ奇附すて。相摸入道殿一門の菩提ととふべき料とし。又人身法供とろろて奪る子どもら等のゆくへとさぐる。身とわぶるして其親くふくーつふもぐーつ又高德乃僧とゑしべ。化石谷の小石とり。たとい宗旨ハちがふとも利益ふ法華経の題目と一石ふ一字づ書ちそ。此川ふ沈め。おん身等親子三人の仏果菩提のしるべーと。誓ー言ハ経石ら鶏養石ら云傳て。末の世ふも殘り。夫婦い益感激ー。今ハもとそ吮ひさ切く伏ら動之助もしるふ吮とうき切て。夫婦親子三人が一度ふ息と

引汐ふ水のあふれを殘ーり。ひとり火独生殘る歎ハ筆ふ尽されぞ。貞直行年七十歳。更級行年六十歳。動之助行年十八歳とぞ聞えける。時も時ふ魂棚の。瓜や茄子と其供ふ。手向ふるや亀毛川西方浄土へおくり火の。鶏船と弘誓の船と。稲葉の露ふ浮雲も。法花の法のたとけ船。一葉の秋と散て行。鳴音ふ聞き竜馬の。髭題目乃功力ふて。實相の風吹て。真如の月の出ぬれば。山咲庄司ハ餘吾郎と親子三人の亡骸の葬と。懇ふ命とふ。娘も。ちべー此家ふく。佛事供養と営べーとふ折ーも。南餘兵衛走来る。相摸次郎時行殿和睦の盟書と内見ふ。情ふ。ふむふ剣ふてそ戰と止王兒君とふ假名寺の陳所へ打越もしるべ。庄司ハ聞。ちーべ我も急ぐべーとそ。餘兵衛と具ー數と吹ふ殘ーり。假名寺ふて出去ぬ。

右ハ記し残せし事なり。苫形の戦の時、奥淵剣太主人大仏九郎の生子をわづら山越ハ落行しが、鎌倉勢ハ取こまれてせん方なく、生子を山神の社の裏ハ隠し置ありて戦しが、肥前元清右衛門駕籠の塵を衛しが、時其社の前を過生子乃泣声を聞つけて捨子なりと思ひ陳羽織ハてみ香包をそえるそ。多くの人の子ハわるく知不便ハ思ひとりて、剣太ハ鎌倉勢を追こしの旧所ハ飯里社の裏と思ふ生子ハ育れど大ハ年こそハ自殺せんとしよる。主人の妻更級の行方をたづねるとハ生ず人。其後山咲窓閑が家ハたのび入て捕まる時物語れる事。清右衛門が動之助ハ語りあさるゆと。符合ハ以て。動之助ハ苫形の戦場ハ生まれる大仏九郎が子なりしと

ハ知る事。此子細を前回ハ入れ忘れし故ハ別記して看官の疑を解く

十七　鶴なりて日こそ

去程ハ相模次郎時行ハ、和睦の盟書を携て吉野の皇居ハ到る。是を進奏しるハ。南朝の帝叡慮ことゝ。己ハ南北両朝ハ和睦ことのひれしハ。時行今ハ望こまりとて剃髪し。仏門ハ入日月のあん旗ハ鶴の如く鶴ヶ岡の神庫ハ。苫形の合戦より大仏九郎の亡しまぞ。都月影入谷判官父子の武略よりしてそ。父子ともハ位階昇進ありて。王君之助前の不行跡と悔おりて。文武とんげむの外他事なし。妹姫ハ病全快して梅ヶ谷郡領の嫡子ハ嫁し。両家むつを深し。又山咲庄司が忠義軍功抜群なりしそ加増とまりしれば児子餘吾郎と

帰依なれバ。わりなくて吾妻と婚姻を取むすびぬ。庄司が妻淀瀬が喜び
ひとつて並ならん。南餘兵衛とも帰参なる。亡父南方十字兵衛が禄ハ加増
しそ与へられバ。妻母ハ孝を尽し。窓太郎を養育し。朝鳥の刀と家宝
とし。孝子の美名世ニ高く聞えぬ。觜元渋右衛門が妻於破矢ハ剃髪
まして尼となり。篝火の尼と共ニ鎌倉霧が沢の月輪寺の境内ニ庵を
むすびて住。大仏九郎夫婦。および渋右衛門。動之助。堂左衛門ら等が
菩提をとふ。五大院左衛門が五輪の塔も月輪寺にうつし建。其下ニ
彼石の鯱首を埋てありしとぞ。放駒の小柄の小刀も同寺へ寄附し
名るとなん又大仏九郎夫婦が集めたる金ハ相撲入道一門の自殺ありし
東勝寺ニ寄附し。濡髪の名笛楊貴妃の身摺の名香のなかありも
同寺ニ納めて寺宝とす。僕露助ハ武士ニ取立られて餘吾郎ニ仕へ。

妻於関と共ニ益忠勤をつとめけるね。僕夢平も武士になりて庄司ニ仕ふ。
玉兎之助ハ衆僧を供養して白拍子都。動之助等両人の菩提の為
とん餘吾郎ハ紀州高野山ニ祠堂金二百両をおさめ。祖父の霊を祭
て前の罪をあがなひ又十字兵衛が霊を祭るとし懇ろ蛙鳴丸の刀を
家宝とし。かの竹の刀ハ一生守刀として自短気をつゝしみぬ。山咲窓閑ハ
古今傳授の秘書を南朝の帝ニ奉る。玉兎之助より扶持を受て
隠者となり。狂言綺語と翻して。讃仏乗の因転法輪の縁としぞく。
白拍子都が菩提をとふて尊し。其名ハ後世ニ朽ず。燕子花の句夏
の沢水の句。人口ニ膾炙して。今の世までもいひつたへを明かなるところハ
王法あり。暗き所ニハ天罰あり。隠悪といへども必報あり。悪人一旦盛なるも
餘殃の風ニちりけて其枝葉を枯し。善人一旦衰るも餘慶の春は

あれて。再び花咲時もあり。皆是天理のしらしむる所なり。されバ浮世乃興亡栄枯人生の禍福吉凶一部の小説に異なることなし。其巻末と見されバ暁し得らるべきぞ。豈悟ざるべけんや

雙蝶記巻之六終　全部大尾

京傳店　自画賛扇新図色々　ただいま入きせるの品ハ[illegible]風流の雅品あまたあり

讀書丸　一つつみ　壱匁五分　[illegible]

大極上品奇應丸　一粒壱文　[illegible]

十三味　薬あらい粉　水晶粉　一包壱匁二分　[illegible]

京山てんこく　[illegible]　京山家

むしこつけ薬　珊瑚珠　[illegible]

江戸京橋南　山東京傳店

江戸

醒醒齋山東京傳編

一陽齋歌川豐國畫

傭書　橋本徳瓶

剞劂人　小泉新八

山東京傳著　永壽堂近刻

雑劇考古録　一名一目千古集　前編大本五冊近刻

女郎ずき若衆ずきそして今の狂言尽し野郎かぶき[illegible]寛永正保の頃の古画元禄以来の[illegible]役者の傳　江戸中橋の芝居古雅古風なる事の考[illegible]

京傳自画賛扇并讀書丸京山篆刻[illegible]水晶粉　取次所　大坂[illegible]河内屋太助

永壽堂近刻繪入讀本并繪草紙合巻目録

盛衰記五色の狂言 全部五册
山東京傳作 青黄赤白黑
歌川豊國画 繪入讀本

青色の一回は武士主従そつくる白色の一回は亡霊中の武者白鷺白梅白旗のごとく鳥獸草木器物大道具小道具衣裳ふくるまで白き物たりとあらざる一回をつくる五色とりふさまりあるしき趣向の繪入讀本之

大晦日かけ取物語 繪入讀本 全部五册
山東京傳作

賢愚貧福かけ取てつくるもありてつくるもあり十一回ふつくるなりつきて作乃繪入讀本之

實方雀物語 繪入讀本 全部六册
山東京傳編 柳川重信画

実方朝臣小野小町の幽霊にあふあるあるあるあれ実方もぐりの怪談あるあるあるあれ黒塚ふしき木塚刻字櫛石乃由来あそぬまのかしらを恩ふむふるる孫太郎虫のいとしなるをもて東奥近国の故事をあつめて一部の物語ふつくるなり

琴声美人傳 全九册
山東京傳作 歌川豊國画

好漢狂女手車之鐵炮式が櫻花の諫言奥州が時鳥の血文

五絃集半面美人 全九册
八二編絵草紙合巻ふつくる